

〈要約〉

「観光立国」日本、これからの文化財観光 ～文化遺産と観光は共生できるか～

The tourism and cultural assets for distinguishing Japan as a tourism nation

～ The coexistence of the tourism and cultural assets ～

高 橋 力
Chikara Takahashi

地域振興の手法として各地における様々な文化遺産（人物も含む）を活用した観光開発が注目されて久しい。

いま、観光開発と文化財保護をめぐる地域振興の現状は、難しいと言ってよい。それは多くが、観光開発と文化遺産保護の双方に対する均衡確保の失敗に起因しているのではないだろうか。例えば、「世界遺産観光ブーム」もこの問題の発生システムに見られるように思う。「世界遺産」という観光ブランドを得ると観光開発に力を入れなくなる。住民、行政の熱意も冷め、観光開発による地域振興の技術さん失われてしまう。

一般に認知された観光ブランドはなくとも、それぞれの地域に培われてきた文化遺産は、地域自らが自信と信念をもって保護し、自律的に観光活用していくことが望ましいことは皆が理解しているだろう。しかし実際には難しい。いかにしたら観光開発と文化遺産保護が共生出来るのか、有用な知見、カギを得たいと本論に取り組むことにしたところである。

地域の活性化、観光振興と文化財観光について、国の考え方、地方の意見、実践事例を踏まえ、調査分析してきたが、文化財保護と観光開発の相互依存性は、純然たる文化遺産の保護と、これに隣り合わせに存在する観光収入を目的とした経済活動の相互依存性である。観光開発を推進するあまり、経済活動が文化財保護の重要性よりも前に押し出されてしまい、文化財保護の意義を忘れてはならない。逆の場合も問題だ。つまるところ、文化財保護と観光開発は、車の両輪であると同時に、両刃の剣である。

先人を含む文化遺産の保護継承と観光開発、活用は、取り組みの仕方であり、大事なものを保護しつつ観光客に見ていただき、理解を深めて頂くことは、文化財を考える上でも、観光の面においても違背するものではない。文化財保護の立場からガードを固くするのではなく、また、観光サイドから積極的に文化財を活かす努力が必要である。

縦割り回避、協力し合うことにより、文化遺産と観光は共生出来ると信ずる。